

## 問題

以下のA(音楽)、B(美術)から、一題を選んで論述しなさい。

選んだ問題の記号を、解答用紙の【 】に必ず記入すること。

(注意事項：解答用紙の1マスを1字とする。句読点も、行末の場合を除き1字と数える。

算用数字やアルファベットは、1マ스에 2文字としてよい。)

\*原文が常用漢字以外のところは、一部「ふりがな」をふってある。

\*出題に当たり、原文の一部を変えている。

**A.** 次の資料は久保田慶一編集代表『楽譜でわかる20世紀音楽』(アルテスパブリッシング、2020年)から、長島剛子+梅本実著「第7章 語りと歌の狭間で—シェーンベルクの表現主義」を一部抜粋したものである。これを読んで、下の(1)(2)の設問に答えなさい。

### シュプレヒシュティンメの記譜法と歌唱法

「シュプレヒシュティンメ(Sprechstimme)」は「シュプレヒゲザング(Sprechgesang)」ともいわれ、語るごとと歌うこととの中間に位置する声楽的発声の一種です。これは「語り」を「音楽」に、より密接に融合させるために編み出されたもので、1897年にE.フンパーディング(1854-1921)がオペラ《王様の子供》ではじめて用いた技法とされています。語りの声部は、音符の符頭に「x」をつけて記譜され、音の高さ、リズムが定められています。シェーンベルクは《グレの歌》第3幕でこれをはじめ採用し、晩年の《ナポレオンへのオーデ》などにいたるまで、いくつかの作品で使用しました。《月に憑かれたピエロ》では、ごく一部の例外をのぞいてほぼ全面的に使用しています。

記譜法は《グレの歌》ではフンパーディングを踏襲していますが、《月に憑かれたピエロ》では、音符の棒(符幹)に「x」をつける独自の記譜になり、《ナポレオンへのオーデ》では五線ではなく一本の線に音符を書き込むスタイルに変遷していきます。

また「シュプレヒシュティンメ」の歌唱法に関して、シェーンベルクは《月に憑かれたピエロ》初版スコアの序文に次のように記しています(一部略)。

シュプレヒシュティンメのパートの、音符により定められている旋律は(とくに指示のあるいくつかの例外をのぞいて)、うたうためのものではない。演奏者は、記譜されている音の高さをよく考慮したうえで、それを Sprechmelodie(語る旋律)に変えなければならない。このときに

1. 演奏者はうたう場合と同様に、リズムを厳格に遵守し<sup>じゅんじゆ</sup>なければならない……
2. ……語る音にも音程は定められているが、それはすぐに下行あるいは上行させることによりその音高から離れる。演奏者がとくに避けなければならないのは、「歌うような」語りの調子に陥ってしまうことである。これはまったく作曲者の意図ではない……

つまりこの序文でシェーンベルクは、「シュプレヒシュティンメ」が歌うためのものではなく語るためのものであることを強調し、指定されたリズムは厳格に守りつつも音程に関してはある一定の自由を認めているわけです。

(以上、梅本)

### シュプレヒシュティンメの問題点

作曲者によってこれだけ詳細に解説されているにもかかわらず、現在にいたるまでシュプレヒシュティンメの歌唱法に関して、さまざまな議論がなされてきました。しかし決定的な解決法が見出されているとはいえません。これにはおそらく次のような理由が考えられます。

1. 2オクターヴ以上(ホから2点嬰ト)までの広い声域  
人が普通に話す場合は2度か3度の音域の幅で語り、演劇などでドラマティックに語っても1オクターヴの範囲を超えることは稀です。
2. 非調性的な音程の連続  
指定されている音高を正確になぞること自体が難しいだけでなく、楽器と一緒にした場合、その非調性的な音程関係が調性音楽に慣れている演奏者には不自然に感じられ、音高を維持することが至難の業となります。
3. 高い音域での音の持続  
歌唱せずに語りの声で高い音を持続させることは、声楽家にとって非常に不自然な作業となります。

### 当時の朗読術

ドイツ語圏では昔から現在にいたるまで、メロドラマというジャンル以外でも詩を朗読することが好まれています。シェーンベルクの活動していた時代、朗読はどのようにおこなわれていたのでしょうか？ 1910年から30年代にかけて最も有名であったオーストリアの俳優A.モアシー(1879-1935)は、J.W.ゲーテ(1749-1832)やF.シラー(1759-1805)の詩を朗読して録音に残しています。私が聴いたゲーテの『魔王』の朗読はギター伴奏でおこなわれ、彼は非常にドラマティックに、かつ多彩な音色と幅広い声域を駆使して、表情豊かに魔王、父、子の三者を語り分けていました。とくに魔王の語りは高い声域でまるでうたうように母音を伸ばしていたのが印象的でした。現代の朗読と聴き比べるとかなり表情過多といえるものですが、その語り方はシェーンベルクが《月に憑かれたピエロ》で追究した濃厚な表現に通じるものを感じることができました。(以下省略)

(以上、長島)

- (1) 19世紀末から20世紀にかけて生まれた音楽技法から、あなたが知っているものを一つ選び、300字以内で述べなさい。
- (2) 《月に憑かれたピエロ》の序文から感じ取れるシェーンベルクが求める表現様式を、資料と関連付けつつ、あなたの自身の知識や経験を交え、700字以内で論じなさい。

B. 次の資料は、奥村高明著『エグゼクティブは美術館に集うー「脳力」を覚醒する美術鑑賞』（光村図書出版、2015年）から一部抜粋したものである。これを読んで、下の（1）（2）の設問に答えなさい。

この部分に記載されている文章については著作権法等の問題から公表することができませんのでご了承ください。

この部分に記載されている文章については著作権法等の問題から公表することができませんのでご了承ください。

- (1) 美術や創造性について、なぜこのような内容の話しがされるようになったのでしょうか。その背景について、資料、自身が美術作品を制作・鑑賞するときの思考や判断、社会の変化などを手掛かりに、思い付いたことを300字以内で記述しなさい。
- (2) 創造性や美術作品を制作したり鑑賞したりするときに使う能力に関するあなたの考えを、資料と関連付けながら、あなた自身の知識や経験を交え、700字以内で論じなさい。

# 令和5年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 総合型選抜入試 芸術・表現コース

音楽または美術に関する文書資料を提示し、それに関して1000字程度で論述させることにより、読解力、論述能力、および芸術に関する知識や関心を総合的に見ることをねらいとする。